

はしがき

本書は一九九六年から一九九九年まで、三年間にわたって行った共同研究、「文学における近代―転換期の諸相―」の報告書である。

はなはだ私事にわたるが、実は、この共同研究は、私が日文研に赴任してはじめて行ったものである。というより、そもそも私は共同研究なるものの「代表者」になったのも、これがはじめてなのだ。

というわけで、何もかもまったく未経験なので、まずは、「文学（美術・建築等々も含む）」と「近代」をキーワードに、専門分野を異にする参加者の、いきいきとした知的交換、知的交流の場が作ればいいと、上記のような緩やかな題目を設定したのだった。

こうして船出して三年、開催された共同研究会はつごう十五回、発表者はのべ三十七名にのぼった。「代表者」がはなはだ頼りないにもかかわらず、毎回、実に内容豊かで面白い発表が続き、刺激をうけた参加者の議論が白熱するなど、まことに願ってもない展開となった。

井波 律子

思い切り網を広げた題目ではあったが、それも回を重ねるうちに、この論文集に見られるように、参加者がそれぞれ自らの問題意識にもとづきながら、日本の近代における文学および諸芸術をとらえかえすというふうに、おおむね方向性が定まって来た。自然に行く先が見えて来たのだから、これまた願ってもない展開であった。

さらにまた、この共同研究会で何よりの収穫は、私自身もそうだが、ほとんどの参加者がこれを機に、新たなテーマをとりあげ、発表したり論文を書いたりされたことである。こうした参加者の姿勢が、この共同研究に新鮮な弾みをつけることになった。

私にとって初体験の共同研究がかくも順調に推移したのは、ひとえに参加者各位のおかげである。また、幹事として大活躍してくれた井上章一氏の助力なくしては、とても三年間、やり通すことはできなかったと思う。

かくして、最後の仕上げとして、参加者に論文の執筆をお願いし

たところ、十一編の論文が集まり、めでたくここに共同研究報告を刊行することができた。お忙しいなか、力作を執筆してくださった、池内紀、鈴木貞美、大嶋仁、君野隆久、宇佐美斉、金春美、原章二、小谷野敦、小谷晴勇の各氏に、心からなる感謝を捧げたい。

二〇〇〇年五月